



東歌の序詞・枕詞の一考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土田, 知雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00000549

東歌の序詞・枕詞の一考察

土 田 知 雄

北海道学芸大学旭川分校国文学研究室

Chikao TSUCHIDA : A Study on "Joshi"
and "Makurakotoba" in "Azumauta"

1

東歌を収めている万葉集巻十四が、他の諸巻に比して種々の特異性を有していることは、こゝに多言を要しない。しかし、今こゝにおいては、その序詞と枕詞に即して考察するに、これらについても、この巻は相当異彩を放っている。

先ず、その序詞について検することにしよう。今、集中において、¹⁾序詞の使用数の多い諸巻について見るに、次の如くである。

巻名	雑歌	相聞	挽歌	計	比率
4	53			53	17%
7	23	17	1	41	12%
10	7	70		77	14%
11		171		171	35%
12		111	6	117	31%
14	5	97		102	49%

この表によれば、この巻の序詞の総数は第3位であるが、頻度数では断然首位を占めている。よつて、この巻ではいかに多くの序詞が用いられているかが知られよう。しかも、この巻の序詞は、量的に超群であるばかりでなく、質的にも特異なものが少くないのである。

注 1) 今、便宜上、万葉集大成6所収の境田四郎氏の統計に従つた。しかし、筆者の調査によれば、巻十四の序詞の数は、103とすべきであると思ふ。

2

さて、今一首における序詞の位置を見るに、初二句に跨るもの33首、初二三句に跨るもの40首、三四句に跨るもの5首である。特殊なものとして、

ま小^{こも}薦の 節の間近くて 逢はなへば 沖つ真鴨の 嘆ぞ吾がする (3524)

初句から二句の中間までと、四句がともに序詞になるという不規則なものもある。

岡に寄せ 我が刈る草の さね草の まこと柔は 寝るとへなかも (3499)

この序詞は、四句をへだてゝ遙かに五句を起しているのである。

河上の 根白高草 あやあやに さ宿さ寝てこそ 言に出にしか (3497)

この場合は、初二句が遙かに四句を起し、

紫草は 根をかも^む竟ふる 人の児の うらがなしけを 寝を竟へなく (3500)

この場合は、五句を起している。

駿河の海 磯辺に生ふる 浜つづら 汝を憑み 母に違ひぬ (3359)

足柄の まゝの 小菅の 菅枕 何か纏かさむ 児ろせ手枕 (3369)

前者は初二三句が譬喩で、自分の周辺の景物を捉え、その伸びまつわつている様子を、自分が男にまつわりついている様に譬えた。環境の景物の提示は、古代歌謡において常に見られる構成であるが、こゝではそれを「汝を憑み」に続けたのは、典型的ではなくて気分象徴的なので、古代性を克服して、作者の情熱を奔出させるのに成功している。

後者は初二三句中に、「場所＋景物」の提示に止らず、「何か纏かさむ」の目的語にまで発展させ、これに序詞の手法をからみ合わせてある。口誦性に富んだ歌でありながら、発想上古代からの飛躍が認められる。

これらは、ともに普通の序詞とはやゝ趣を異にしているが、やはり序詞の一種と見なしてよからう。このように、この巻では実に多彩な序詞が用いられている。

前述のように、序詞中、初二句に跨るもの、初二三句に跨るものが、この集では多く見られるが、ことに後者が多いことは、その成長を示すものとして注意せられる。すなわち、これは初二句だけのスペースでは、もはや十分でなくなつたものと思われる。

これに関連して、その枕詞の使用数がきわめて低いことが考えられなければならない。元来、序詞の使用度数の多い諸巻は、枕詞のそれも決して少くない。例えば、巻十三の196は古長歌を含む巻であるから暫く措き、巻十一の177、巻十二の142、巻十の104、巻七の103というように、相当の枕詞を用いている。しかるに、この巻において、序詞の頻出度数の高率なのに反して、枕詞の使用度数49ときわめて低いのは見逃すことはできない。

思うに、これは東歌の口誦性の豊かさを示すものであろう。すなわち、それは東歌の発想法が中央の和歌に比して流動性を存して、未だ固定しなかつたことを示すものと考えられる。序詞・枕詞に即して言えば、序詞は比較的流動性に富んでいるのに対して、枕詞は後世になるに従つて固定性が濃厚になる。この巻において、序詞中に枕詞を包含するものはわずかに4首、譬喩の歌または譬喩を用いた歌にはまつたくこれが用いられていないで、いわゆる直叙式の歌に用いられているものが多い。そして、4個の枕詞も、「うち日さつ」(3505)は、「うち日さす」の転と見られるが、「薪樵る」(3433)・「しらとほふ」(3436)・「むろがやの」(3543)のように、その用例はきわめて少い。「薪樵る」は、実景をそのまま用いたものと思われる。「しらとほふ」「むろがやの」の語義は、未だ明確ではない。「しらとほふ」は、枕詞解に白礪掘にて保布は掘るの誤とあり、折口信夫博士の万葉辞典には、常陸国風土記の「風俗諺曰白遠新治之國」とあるのを引いて、志良登保布はにひ或は寧ろにに続くと言っている。1) 武田祐吉博士は、「シラは白か著クかであろうか、大きく目に立つことをトホシロツという、その語が逆に接続した語でもあろうか。もしそうとすれば、トホフは通る、融るの語と通るのであろう。新しいものは目立つので、ニヒ(新)に冠するか。」と説かれた。次に「むろがやの」は、2) 武田博士によれば、「語義は室草で、室を蔽つている草が、その家を包んでいるというので、次の句に懸るのだろう。または草の蔓とツルに冠するか。」とある。上の如く、いずれも語義未詳で、用例も非常に少い。

直叙式の場合でも、その枕詞は用例が少い。他にも用例の多く見られる枕詞は、「あしひきの」(3462)「梓弓」(3489・3490)「うつせみの」(3456)——これらは左註に柿本朝臣人麻呂歌集の歌とある——、「草枕」(3403)——これはタの一音にかゝるといふ特殊なものである——ぐらいなものに過ぎない。「梓弓」も「寄る」にかゝつていて、その用法が屈折している。「うつせみ」も、やゝ特殊なものである。

「潮船の」(3556)「庭に立つ」(3454)「風の音の」(3453)「陰夜の」(3371)「はだ薄」(3506)「水鳥の」(3528)「夏麻引く」(3381・3348)「白雲の」(3517)「青雲の」(3599)「さ衣の」(3394)などは用例の多いものではなく、「漕ぐ船の」(3557)「山鳥の」(3468)「浜渚鳥」(3533)「波の穂の」(3550)などは、きわめて用例が少ない。「波の穂の」「浜渚鳥」「おふしもと」(3488)は、むしろ特殊のものと言うべきである。「浜渚鳥」は、「足悩む」という東国方言にかゝり、「波の穂の」「おふしもと」は、相当に実感がこもっている。かくてこれらの枕詞は、中央の伝統とは比較的没交渉に用いられたとおぼしく、多く実景への関心が認めれ、彼等の実生活にかなり連関をもっていることが認められるので、その定着する以前の姿を示すものと言えよう。

東歌は東国人の愛欲や恋愛をテーマとするものが多く、この点では記紀歌謡の中にも類似するものが少なくないのに、記紀歌謡と同一のものは、わずかに「あしひきの」「あらたまの」「あり衣の」(これも人麻呂歌集中の歌にあるもの)「草枕」等に過ぎず、枕詞の上では記紀歌謡との連関はあまり認められない。右のように、東歌の枕詞使用法は特異なものがある。このような枕詞の未定着の原因としては、用言を修飾する枕詞が多いことにも関係があらう。かゝる枕詞は、序詞的な性格をも有し、後世まで非固定性を遺存していた。これらは、記紀歌謡中にあらわれたものを、さらに発展させたものと思われる。

悩しけ 他妻かもよ 漕ぐ船の 忘れは為せな いや思ひ増すに (3557)

おして否と 稲は春かねど 波の穂の いたぶらしもと 昨夜ひとり寝て (3550)

これらになると、その枕詞の置かれた位置も関係があらうが、単に修飾句としてばかりでなく、一首の発想に大いに参与していると言えよう。これらのダイナミックな用法は序詞の性格と近似するもので、形式的な枕詞の発生を必要としなかつたものであらう。

自然の景物を用いる場合には、枕詞よりも序詞の方がスペースが広く、その修飾する範囲も広く、かつその素材採択の自由も大きいことは明かである。一方、³⁾枕詞が呪詞的性格が濃く、簡約された短小な語に呪力がこもっていると考えられていた時代には、その効果を相当期待されたことであらうが、こういう信仰的背景が後退して、かなり自由に実景を切り取つて、これを活用し得るようになると、枕詞は序詞の前から一往衰退せざるを得ないのである。

薪樵る 鎌倉山の 木足る木を まつと汝が言はば 恋ひつつや在らむ (3433)

この場合、この序詞は即興的に用いられたものであり、従つて「薪樵る」も伝統的な枕詞でなく、実景をもつてしたところに、序詞全体とマッチし、そこに興味が感ぜられたのであらう。このように、景物を具体的に表わそうとするならば、枕詞を使用するよりも、序詞として全体を統一した方が効果的であることは多言を要しないところである。かくて、序詞のいちじるしい発達が東歌において見られたのである。

注 1) 武田祐吉氏 増訂方葉集全訳十 p. 317

2) 同 氏 前掲書 p. 415~416

3) 折口信夫氏 国文学註釈叢書十七、枕草子解説 p. 24~26

次に、東歌において、序詞の本旨を引き起す形式を検するに、次のような譬喩形式が多く見られる。

(1) 相摸路の 洵綾の浜の 真砂なす 児らは愛しく 思はるるかも (3372)

- 崩岸上から 駒の行このす 危はども 人妻児ろを ま行かせらふも (3541)
 (2) 馬来田の 嶺ろの笹葉の 露霜の 濡れて別きなば 汝は恋ふばそも (3382)
 筑波嶺に かか鳴く鶯の 音のみをか 泣き渡りなむ 逢ふとはなしに (3390)

(1)の類は3首、(2)の類は実に31首ある。(1)の類は、その譬喩の種類は明喩に属することは、疑いない。(2)の類は、多少問題もあろうが、明喩に準ずるものとしていくだろう。(1)の類は記紀歌謡に比して、さほど発達していない。(2)の類は、譬喩と本旨との関係が、明快になり、合理化しているのが認められる。そこに、譬喩の発達の姿を見ることができる。

かゝる傾向は、序詞以外の譬喩の部分にも認められる。

- 利根河の 河瀬も知らず ただ渡り 浪に遇ふのす 逢へる君かも (3413)
 妹をこそ あひ見に来しか 眉叟の 横山辺ろの 鹿なす思へる (3531)
 沖に住も 小鴨のころ 八尺鳥 息づく妹を 置きて来のかも (3527)

このように明喩が発達しているのは、東国人の自然観に基づくところ大であろう。すなわち、彼等の自然観が古代における主客未分化の域から脱し始め、自然物象を客観視し得る方向へ次第に向ったことと連関があると思う。

これに伴なつて、表現形式の上でも記紀歌謡に見られる古代性を漸次棄却しようとしている。すなわち、¹⁾折口博士のいわゆる矚目発想法、²⁾土橋寛氏の即境的景物を提示する前段と、それに本旨を寄せる後段との二段構造様式は必ずしも顕著ではない。そして、序詞において、即境的ないし矚目的景物から、一般的景物への変遷が見られ、前段の景物と主想部との接続に見られた唐突感、飛躍感が失なわれて来ている。すなわち、両段の飛躍の転換に対する興味よりも、譬喩の媒材の適否が主要な関心となつて来ているのである。かくて、自然物象に対する注意を深化して来るのである。

- さを鹿の 伏すや叢 見えずとも 児ろが金門よ 行かくし好しも (3530)
 等夜の野の 兎窺はり をさをさに 寝なへ児故に 母に嘖ばえ (3529)
 沼二つ 通は鳥が巢 我が心 二行くなもと 勿よ思はりそね (3526)

これらの歌中の序詞は、受動的に即境的ないし矚目的風物として与えられたものではなくして、作者周辺の風物の中から選択されたものであろう。それゆえに、これらの序詞には、二段様式の前段においては見られない別種の興味と迫力がある。ことに、3526番の序詞の如きは、彼等の体験に基づいていることは明かであるが、これに加うるに東国人一流の虚構があり潤色があるのではなかろうか。³⁾武田博士は、「水鳥が沼から沼へ飛び移るのを見て詠んだようだ。勿論その両方に巢があるわけではないだろうが、両方に巢があるように言つたのは、二個処に行く処があるわけでないことをあらわすために、設けたことである。」と説かれた。そこにフィクションの存在を考えるのもあながち根拠のないことを言うのではない。

- 紫草は 根をかも竟ふる 人の児の うらがなしけを 寝を竟へなく (3500)
 垣越しに 麦食む小馬の はつはつに 相見し子らし あやに愛しも (3537)

これらは、いずれも初二句が序詞であるが、その表現内容は豊富である。彼等の体験が力強く再現され、活用されている。これらの歌の生命を維持するものは、序詞であるといつても過言ではない。それほど、彼等はこれらの自然物象を重視しているのである。

- 比多潟の 磯の若布の 立ち乱え 吾をか待つなも 昨夜も今夜も (3563)

この歌に比較すれば、前段における「場所+景物」の素朴な形式から、明かに脱していることがわかる。

伊香保ろの 八尺の握塞の 立つ虹の あらはろまでも さ寝をさ寝てば (3414)

上つ毛野 まくはしまどに 朝日さし まぎらはしもな ありつつ見れば (3407)

いずれも古代的な景物の提示から解放されて、特異な環境を序の内容としている。これだけ印象的に風物を提示することに成功しているのは、現実において生々しい体験があつたに相違ない。しかも、かゝる用法が偶発的なものではなくして、非常に増加して多様に発達しているのである。かくて、東国の地名・風物を中心とする序詞も、彼等の生活の現実性を基盤としていることに注意したい。

そもそも、東歌の制作動機は恋愛生活の細部を詳細に描くことよりも、主として夫婦相会の情熱を鮮烈に表出しようとするにあつたろう。その表現しようとするテーマはほとんど大同小異なのであるから、彼等の興味はむしろ序詞の構造にあると言ってもよいと思う。それゆえ、これらの作者の努力もこれに注がれたであろう。そこに風物に対する独特の関心が認められ、聴衆の前に具体的感覚的に描こうとしているのである。

小筑波の 繁き木の間よ 立つ鳥の 目ゆか汝を見む さ寝ざらなくに (3396)

春の野に 草食む駒の 口息まず 吾を思ふらむ 家の児ろはも (3532)

前者の序詞中の光景は、この地方の農民が常に接しているところで、彼等の共鳴をかち得たものである。後者は彼等の農耕生活中に目撃したところであろう。それゆえ、それらには彼等の生活の反映が明かに見られる。

鳴瀬ろに 木屑の寄すなす いとのきて 愛しけ夫ろに 人さへ寄すも (3548)

大船を 舳ゆも 鱸ゆも 堅めてし 許曾の里人 願さめかも (3559)

これらの歌も、譬喩によつて生きていることは多言を要しない。これらの譬喩も、それらの媒材に対する観察なくしては生れなかつたであろう。しかも、かなり詳細な注視をしているのである。

青楊の 萌らる川門に 汝を待つと 清水は汲まず 立処ならずも (3546)

ま愛しみ さ寝に吾は行く 鎌倉の 美奈の瀬川に 潮満つなむか (3366)

これらに見られるように、彼等の恋愛が自然の環境の中で行われたために、対象への注視も相当に進んで来たものであろう。

児毛知山 若鶏冠木の もみつまで 寝もと吾は思ふ 汝は何か思ふ (3494)

時の久しいことを表わすに用いた「若鶏冠木のもみつまで」の句は、この歌の生命であろう。この句の表現は、素朴ではあるが、現実的であり、具体的であり、なかなか印象的である。こゝにおいては、風物への注視は相当進んでいることが認められる。かゝる段階に到達することになると、風物を媒材とした譬喩は、かなり迫真の力を有して来る。

かくて、記紀の恋愛歌に見られた序詞と、東歌のそれとは趣を異にしている。前述のように、記紀歌謡においては、二段形式による序詞の技法が少くないが、主客分化の傾向は、東歌の序詞に進展を促したものであろう。そして、そこに独特の現実性や写実性を付与する結果になつたものと考えられる。

- 注 1) 折口信夫全集第一巻 p. 345~351
 2) 土橋 寛氏 序詞の源流(万葉30年10月号)
 3) 武田祐吉氏 増訂万葉集全註釈十 p. 401

次に、東歌には地名、国名が多く詠みこまれていることはすでに先人の指摘しているところであるが、¹⁾ 国名、地名を詠みこんだ歌は実に134首（国名、地名ともにあるものは19首、国名のみのもの10首、地名のみのもの105首）に上り、実に58%の高率を示している。これは²⁾ 兎山信一氏の説のように、東歌の民謡性がこれを要請したものであろう。さらに、³⁾ 武田博士の指摘のように、東歌の採集記録という立場が、かゝる地名を有する歌に重点がおかれたものと考えられる。

先ず、序詞における地名提示の形式は、

上つ毛野 伊香保の嶺ろに 降る雪の 行き過ぎかてぬ 妹が家のあたり (3423)

足柄^{あしがり}の 箱根^{にこくろ}の嶺ろの 和草^{わくそう}の 花つづまなれや 紐解かずねむ (3370)

このように、初句に大地名、二句に小地名を提示し、三句に景物を据える形式が多く、約25首あり、これに準ずるもの6首を数える。初二句にまたがる序詞においては、

伊豆の海に 立つ白波の ありつつも 継ぎなむものを 乱れ始めめや (3360)

伊波保ろの 傍^{そば}の若松 かぎりとや 君が来まさぬ うらもとなくも (3495)

このように、初句に地名、二句に景物を出すものが多く、21首を数え、これに準ずるものが3首ある。

直叙式の歌においても、初句に地名の提示があるもの22首の多きを数える。さらに、次のように、初句に大地名、二句に小地名を提示するもの10首を数える。

信濃なる 須賀の荒野に ほととぎす 鳴く声きけば 時すぎにけり (3352)

下つ毛野 安蘇の河原よ 石踏まず 空ゆと来きと 汝が心告れ (3425)

地名の提示法から見ると、「地名+景物」の形式によつていことがわかり、この点では記紀歌謡以来の伝統を守つていと言えよう。しかし、東歌においては、すでにこれらの伝統形式に変化が始まつている。

筑波嶺に 石もとどろに 落つる水 世にもたゆらに わが念はなくに (3392)

真金吹く 丹生^{にふ}の真朱^{まそほ}の 色に出で 言はなくのみぞ 我が恋ふらくは (3560)

前者においては、初二三句の序詞は伝統形式との推移が見られ、ことに「石もとどろに」によつて具体的に景物を描こうとする意図が見られる。これを「足柄の刀比の河内に出づる湯の世にもたゆらに見ろが言はなくに」(3368)に比較すれば、その相違が明かに認められる。後者においては、初句においてその地の説明を試みようとしている。

薪樵る 鎌倉山の 木足る木を まつと汝が言はば 恋ひつつや在らむ (3433)

「枕詞+地名+景物」も古い形式であるが、初句の枕詞の写実性といふ、三句と四句との連続の方法といふ、こゝにも新傾向への推移が見られる。

さらに、次の諸作においては、一段と伝統形式からの離脱が顕著である。

わが夫子を 何^{なん}どこかいはむ 武蔵野の うけらが花の 時無きものを (3379)

花散らふ この向^{むか}つ峰^{たかね}の 乎那^{ひな}の峰^{たかね}の 洲^{しづ}につくまでに 君が齡^{とし}もがも (3448)

そこにおいては、古代的用法から脱して、地名や景物をかなり自由に選択して使用していることが認められる。これは、やはり対象への注視が然らしめたものであろう。次の如きは、すでに季感が明かに認められる。これの前提としては、自然への凝視が考えられなければならない。

春へ咲く 藤の末葉の^{うらば} うら安に さ寝る夜ぞなき 子ろをし思へば (3504)

- 注 1) 柴生田稔氏 東歌及防人の歌 (万葉集大成10)
 2) 児山信一氏 新講和歌史 p. 43~45
 3) 武田祐吉氏 上代国文学の研究 p. 338~379

5

序詞が以上のようにきわめて精彩に富んでいるのに対して、枕詞は貧寒の感を免れない、その素材を検するに、植物関係が圧倒的に多い、

はだ薄…………… 1	夏麻引く…………… 2
草蔭の…………… 1	庭に殖つ…………… 1
草枕…………… 1	薪樵る…………… 1
蔓ふ葛の…………… 1	おふしもと…………… 1
山菅の…………… 1	むろがやの…………… 1

これらを見ると、草類が多く、花などはない、これらは彼等の現実生活に必要なものから選んだものであろう、この意味では、花は無縁の存在であつたのである、

動物では、次のように鳥だけが用いられて、獸類は見出されない、これらの傾向は、おゝむね記紀歌謡に同じである、

八尺鳥…………… 1	水鳥の…………… 1
浜渚鳥…………… 1	山鳥の…………… 1
鳩鳥の…………… 1	

天象関係が少くないのも、やはり記紀のそれと傾向をひとしくしている、

白雲の…………… 1	うち日さつ…………… 1
青雲の…………… 1	うち日さす…………… 1
風の音の…………… 1	日の暮に…………… 1
陰夜の…………… 1	

地儀関係

あしひきの…………… 1	波の穂の…………… 1
奥山の…………… 1	

被服関係

韓衣…………… 1	あり衣の…………… 1
さ衣の…………… 1	袴袈…………… 1

器具関係

梓弓…………… 1	あらたまの…………… 1
劔刀…………… 1	鈴が音の…………… 1
漕ぐ船の…………… 1	潮舟の…………… 1

其他

しらとほふ…………… 1	眉曳の…………… 1
うつせみの…………… 1	

前述のように、¹⁾ 枕詞の素材に、草類がきわめて多く、動物では鳥類が圧倒的であること、天象関係が比較的多い点などでは、記紀歌謡の世界と同様である、しかし、「玉」関係のものがまつたくなく、衣服関係の意外に多いのが注意される、²⁾ 「玉」関係のものが無いのは、東国の庶民にと

つて、これらは遠い存在だつたのであろうか。「玉」が祭紀に用いられていたとするならば、東国の農民にとつても関係のないものとは言えないであろう。しかし、これらが見られないのは、当時すでに装飾品としての用法が多くなつたものであろうか。

以上の如く、記紀歌謡の枕詞に比較するに、東歌のそれはおゝむね素材の傾向はひとしくしている。しかし、その造語法においてはやゝ異なる。さらにその用法においてはかなり相違がある。これは、東歌においては、枕詞を具体的、写實的に用いようとしたことがその要因であろう。これは、古代歌謡における枕詞の呪術的用法とは、懸隔のあることである。

かくて、東歌においては、おゝむね枕詞が非固定的に用いられたのである。それゆえ、枕詞の使用回数はいずれも低いのである。

また、一方において、かゝる枕詞の用法は、序詞の用法にかなり近接したため、東歌の活発な、そして多彩な序詞の用法に圧せられて、枕詞の広汎な発展を阻止したものと考えられる。

以上の如くして、東歌においては、序詞の盛行に比して、枕詞が萎縮した理由をほぼ明かにすることができたと思う。

- 注 1) 高木市之助氏 日本文学の環境 p. 23~28
同 氏 記紀時代の生活 (短歌研究 昭和9年9月号)
2) 高崎正秀氏 万葉集の枕詞 (万葉集講座第2巻)

(33.9.30)